

地域課題解決における村落対応の今日的展開

— 高齢化する農村における生活維持の営み —

学位論文内容の要旨

本論文は、現代農村を「高齢化する農村」という視角から捉え、そこに生起するさまざまな地域課題を解決する取り組みにおける村落のもつ機能の今日的な重要性を検証しようとしたものである。

高齢化する農村における課題への村落対応について、秋田県由利本庄市 Y 集落、北海道夕張郡長沼町 C 区、秋田県山本郡藤里町を対象とし、5 つの事例を取り上げる。分析視角は、高齢者を中心とした詳細な社会関係である。家族関係、集団や活動への参加状況、近隣・親族関係、その他日常的社会関係の現状と変化を追うことによって、高齢者の生活補完構造を考察する。そしてこれらの事例を通して、兼業化の進展による社会関係の変容と課題解決の個人化を指摘しながら、村落内社会関係の重要性と、その基層を貫く組織的対応の基盤としての村落の存在を証明しようとする。

第一章では、現代日本農村を巡る状況を、兼業化、過疎化、少子化、高齢化の深化による停滞的状况と捉える。そこでは住民たちの生活保障の外枠として機能していた村落の解体的変動が指摘されながらも、これらの状況の克服に向けた取り組みが各地で展開し、村落を舞台とした様々な実践活動が報告されていることを重視し、現代における村落機能の検討を行う必要を提起する。

第二章では、本論文における分析視角を、「イエ・ムラ理論」「コミュニティ論」「ネットワーク論」を検討しながら、生活の視点に立脚した「イエ・ムラ理論」、そして社会関係と参加の場、意識、物財を捉えている日本のコミュニティ論から「村落」を捉え、個人が所有する社会関係を「ネットワーク」として理解し、地域課題解決におけるそれら資源の構造化について考える視点を提示した。

第三章では、第一章、第二章での検討をふまえながら、具体的な場面での構造化のために、現代農村の高齢化という現象を捉える。それは、多くの課題が横たわる現代農村において、高い高齢化率、これまでの農村研究では、高齢者の日常生活が描かれてこなかったという点、さらに今後の更なる高齢化の進行を鑑み、地域社会の在り方を考えていく必要があるという理由による。そして本論文の課題として、個別対応、家族内解決の限界の先に、第一次的な補完枠組みとして村落を据え、それらが機能するために、村落内社会関係と村落以外の論理で動いている関係性である個人のネットワークや行政等がどのように位置づけられ、課題解決の構造を作り上げられているのかといった点を明らかにするという基本視角を提起する。

以下、第四章から第八章は、実証部分である。

第四章の事例対象地域は、秋田県由利本庄市蔵地区 Y 集落である。

高齢者の生活欲求の一つである関係欲求（仲間に参加し所属して、孤独を避けそこで気持ちの通い合いと心の安らぎを与え、良いことをすれば謝意や尊敬を表してほしいという欲求）に注目し、村落や家族、社会関係に対する高齢者の関係欲求とその充足の様子から、高齢者の生活における関係的資

源供給の補完のあり方を検討した。

第五章では、第四章の事例における個人の側からの「高齢者の孤独」のメカニズムを明らかにすることを目的としている。「高齢者の孤独」は、身体機能の低下に始まり、社会に対する消極的な態度を誘発させ、人間関係の狭隘化を生じさせる。とくに「日中一人暮らし高齢者」の場合は、家族との関わりを通して、若年層に対する遠慮が働き、自分自身に無用感を感じてしまい、高齢者の孤独感を増幅させるとする。

このことから高齢者の孤独感を、個々人のネットワークおよび集団を通して形成される社会関係から切り離されていく過程として捉え、組織的対応の基盤としての「村落」が位置づけられ、村落を枠組みとした社会関係を再活性化させる営みが現代農村では求められるとする。

第六章では、大規模水稻作地域である北海道夕張郡長沼町 C 区を対象地域とし、高齢化する農村における地域農業維持のための組織的対応のあり方を、個別農家の営農志向と生産組織「S」のかかわり方を取り上げることによって明らかにしている。

第七章では、前章の北海道夕張郡長沼町 C 区におけるまとまりの良さの高齢者の生活における意味を、高齢者の関係欲求の充足と区の対応から検討している。

C 区は大規模水稻策地域であることから、農作業や家事において、高齢者は重要な役割として位置づけられており、日常的交際は限界がある。そのため、老人会活動を区の中に定着させることによって、交友関係を維持している。そしてそれを支えているのが、地域内の社会関係であり、その上で老人会の活動に安定性が担保される。とくに区の活動の中に、若年層と高齢者層とのかかわりを設けることにより、区の中で高齢者層が排除されている状況を克服し、関係欲求を満たしている。それは老人会を含めて、区の中で展開されている活動が、個々別々に捉えられるものではなく、区全体の活動の一部として、住民個々人を内包する仕組みを作り上げており、住民個々人も区の一員としての立場として認識する機会を得ることが可能となっていることを言う。

第八章では、秋田県藤里町における自殺予防活動の会「心といのちを考える会」の発足までの動きを事例として取り上げる。これまでの事例が村落内社会関係を中心として捉えてきたのに対して、ここでは町を範囲として活動を展開する会を取り上げている。地域の生活課題顕在化における村落対応の限界、その先にあるネットワークの存在に焦点をあて、現代農村の課題顕在化における村落内社会関係のあり方を検討している。そして近隣の情報を共有し、住民相互に気遣うシステムを再機能させるために、外部のネットワークを組み入れながら、地域内の関係性を再生する取り組みが重要であることを実証している。

終章では第一章から第三章までの研究課題に従い、事例から読み取れる事実を横断的に整理している。

現代農村は、大きくは生活の個別化・広域化・社会化の進展がみられるが、そうした流れのなかでつくられた関係性は個人の課題解決や内容を限定した対応としては有効といえるが、恒常的なそして組織的な課題解決には、村落内社会関係が構造化されて対応しており、そこに今日における村落対応の意味があるとする。そして今日の村落が関係的資源の外枠として機能しつつ、個人をとりまくさまざまな社会的ネットワークを生かす基盤であると結論づけている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 松 岡 昌 則

副 査 教 授 金 子 勇

副 査 教 授 宮 内 泰 介

学 位 論 文 題 名

地域課題解決における村落対応の今日的展開

— 高齢化する農村における生活維持の営み —

本論文は、現代農村を「高齢化する農村」という視角から捉え、そこに生起するさまざまな地域課題を解決するさまざまな取り組みにおける村落のもつ機能の今日的な重要性を検証しようとしたものである。

高齢化する農村における課題への村落対応について、秋田県由利本庄市 Y 集落、北海道夕張郡長沼町 C 区、秋田県山本郡藤里町を対象とし、5 つの事例を取り上げる。分析視角は、高齢者を中心とした詳細な社会関係である。家族関係、集団や活動への参加状況、近隣・親族関係、その他日常的社会関係の現状と変化を追うことによって、高齢者の生活補完構造を考察する。そしてこれらの事例を通して、兼業化の進展による社会関係の変容と課題解決の個人化を指摘しながら、村落内社会関係の重要性と、その基層を貫く組織的対応の基盤としての村落の存在を証明しようとする。

第一章では、現代日本農村を巡る状況を、兼業化、過疎化、少子化、高齢化の深化による停滞的状况を捉える。第二章では、本論文における分析視角を、「イエ・ムラ理論」「コミュニティ論」「ネットワーク論」から検討している。第三章では、第一章、第二章での検討をふまえながら、具体的な場面での構造化のために、現代農村の高齢化という現象を捉える。

以下、第四章から第八章は、実証部分である。第四章は、高齢者の生活欲求の一つである関係欲求に注目し、村落や家族、社会関係に対する高齢者の関係欲求とその充足の様子から、高齢者の生活における関係的資源供給の補完のあり方を検討した。第五章では、第四章の事例における個人の側からの「高齢者の孤独」のメカニズムを明らかにしている。第六章では、高齢化する農村における地域農業維持のための組織的対応のあり方を、個別農家の営農志向と生産組織「S」のかかわり方を取り上げることによって明らかにしている。第七章では地区におけるまとまりの良さの高齢者の生活における意味を、高齢者の関係欲求の充足と区の対応から検討している。第八章では、自殺予防活動の会「心といのちを考える会」の発足までの動きを事例として取り上げ、現代農村の課題顕在化における村落内社会関係のあり方を検討している。終章では第一章から第三章までの研究課題に従い、事例から読み取れる事実を横断的に整理している。そして今日の村落が関係的資源の外枠として機能しつつ、個人をとりまくさまざまな社会的ネットワークを生かす基盤であると結論づけている。

本論文は、日本農村社会学において、戦後農村の社会変動をムラの解体的変動と理解する立場に対

して、ムラ（村落）の今日的意味を検証しようとした論文である。とくにこれまでの村落研究がともすれば村落が解体したとする主張と存続しているという主張の二項対立的に議論が進められることが多かったことに対して、ムラ以外の論理で働く第三者機関や行政、あるいは個人が持つネットワークとの関連からも現代村落の持つ意味を多面的に捉えている。そして家族の内部構造、村落構造、地域社会関係において詳細な分析を行った。その調査手法は戦前から戦後にかけて確立した構造分析的手法の改良であり、このような精緻な調査・分析を行うことが少なくなった今日、現代農村研究のひとつのモデルを提供している。

また、現代農村の課題を高齢化の視点から捉え、村落の持つ機能の重要性を検証したことは、今後ますます高齢化する農村のこれからの対応のあり方に大きな示唆を与えており、高く評価できる。

本論文の三つの章に当たる部分は、査読付きの学会誌に掲載されたものであり、水準の高さを示している。

本論文は、高齢化する農村の将来設計を展望する上で、また調査手法の提起の点で、これまでの農村研究に大きな寄与を与えている。

本委員会は学位申請論文を慎重に審査し、口頭試問を実施して上記の点について審議した結果、全員一致で菅原（庄司）知恵子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。